

「アカデミア・クザーノ」 Bressanone, Italy

設計=MoDus アーキテクツ

正しく、正確で、「然るべき」修復

フランチェスカ・キオリーノ

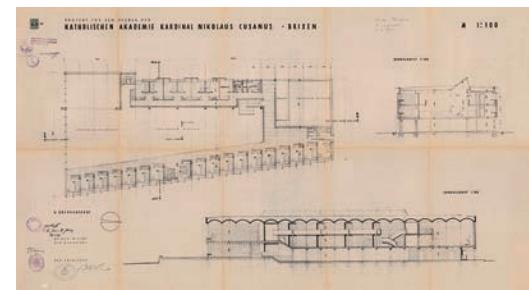
参照 | 本誌pp.16-29

建築設計事務所を開設してまもなく、1961年から62年にオトマール・バルトは生地であり生活と仕事の場として選んだブレッサーノ[アルト・アディジェ州]に、アカデミア・カットリカ・クザーノを設計し実現した。この研究教育施設は、1450年から1464年までブレッサーノ司教だった神学者、哲学者、科学者のニッコロ・クザーノ枢機卿(ニコラウス・クザーヌス、1401-64)に捧げられた。「教会が世界と出会いう場所」——バルト作品について参考できる唯一のモノグラフ(Otmar Barth, Verlag Anton Pustet, Wien 2007)に収録された設計報告書にはこう書かれている。この本館は3階建ての建物で、平面を構成する3つの四角形が南向きに開いて台形をつくる。コンクリート構造は剥き出しの煉瓦壁で覆われた。市の東部を流れるイザルコ川の岸に沿って、セミナリオ・マッジョーレ(大神学校)の近くに配置

された。1枚屋根の下に多様な機能が集められている——バルト建築の多くに見られるテーマだ(本誌pp.28-29に掲載した作品では、宣教師宿舎のヘルベルト館[1971]とスキーチ選手寄宿学校[1977-82])。そのうち最も重要な機能が会議場、短期滞在者用個室、そして礼拝堂である。

アカデミアの建物はその後の修改工事——機能的必要性の変化に応えるため、あるいは新しい法規制を満たすため——の対象となったが、すべてバルト本人が手がけたため複合施設の本質を陰らせるることはなかったものの、それでも場所によっては初期の効果は薄れた。

マッテオ・スカニョールとサンディ・アッティアが主宰するアルト・アディジェの建築設計事務所、MoDusアーキテクツは、アカデミアの運営委員会が開催した招待設計競技で優勝した。彼らの使命はアカデミア一帯を再編し、バルトの建物(本館)のほか、西側の中庭に面した2つの副次的建物(パウル・ノルツ館とミュール館には他の個室、管理人宿舎、その他の会議室があった)も統合し、全体でベッド数96床、10の会議室、礼拝堂、瞑想室、バールと食堂からなる複合施設をつくり出すことだった。さらに、MoDusは地下に新たな会議場を増築する計画も任せられ、バルトの建物の全面的な修改工事を実現した。バルトが建てた本館は、重



オトマール・バルトによる原図:2階平面図、断面図

要な設備刷新と、防火規則に関する工事や建築的障壁を取り壊す工事のほか、時代と共に改変された部分の修復が必要だった。

アルト・アディジェに生まれた建築家バルトのスケッチ、彼が行ったさまざまな介入工事の推移、建築模型や同時代写真を丹念に調べることにより、重要な資料が膨大に生み出された。これらに基づいて、空間の連続、各部屋の規模、ファサードおよび内装の組積壁、石畳の床、自然採光と人工照明、家具調度のコンセプトをできる限り変えずに維持するという明確な意識と意図をもって、建物に手を加えることができた。特に、パティオ、個室への動線となる廊下、講堂としての機能を同時に果たす中央の大ホー



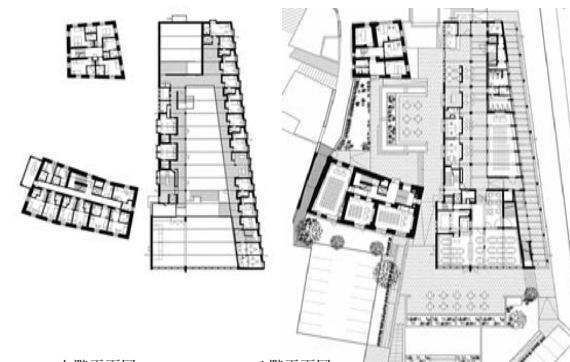
空からの全景



中庭テラスより見る

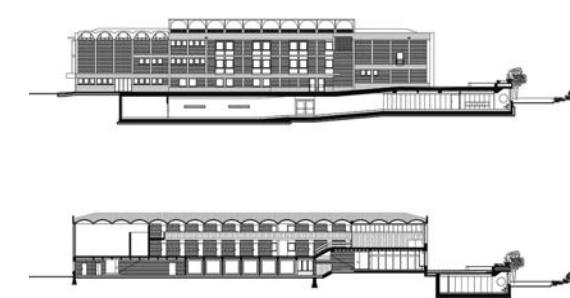


メイン・エントランス側からの全景

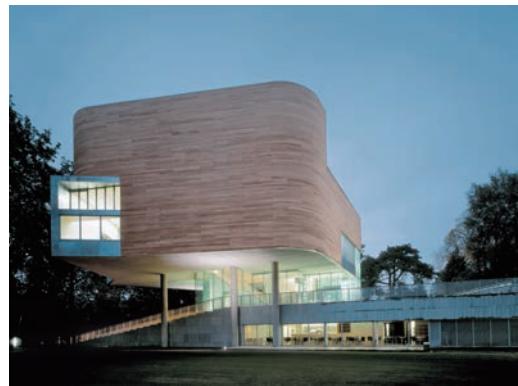


上階平面図

1階平面図



断面図



ルイス・グラックスマン・ギャラリー、2005

われわれがUCCのために最初に実現したプロジェクトは、中央中庭の東に位置する公に開かれた美術館だった。大学の正門に最も近い。板材で覆われたヴォリュームは専有面積を最小限にして風景の中に置かれたため、既存の樹木や公園の環境は守られた。石灰岩の基礎が大通りと川沿いの遊歩道を結んでいる。このルイス・グラックスマン・ギャラリーが大学内の芸術活動の中核になるのに時間はかからなかった。今では都市の文化生活に不可欠の場所である。

その数年後、キャンパスのコネクションを改善するための大規模な計画の中で、中央中庭の北辺に当たる、複



カヴァナー・ブリッジ、2006-18

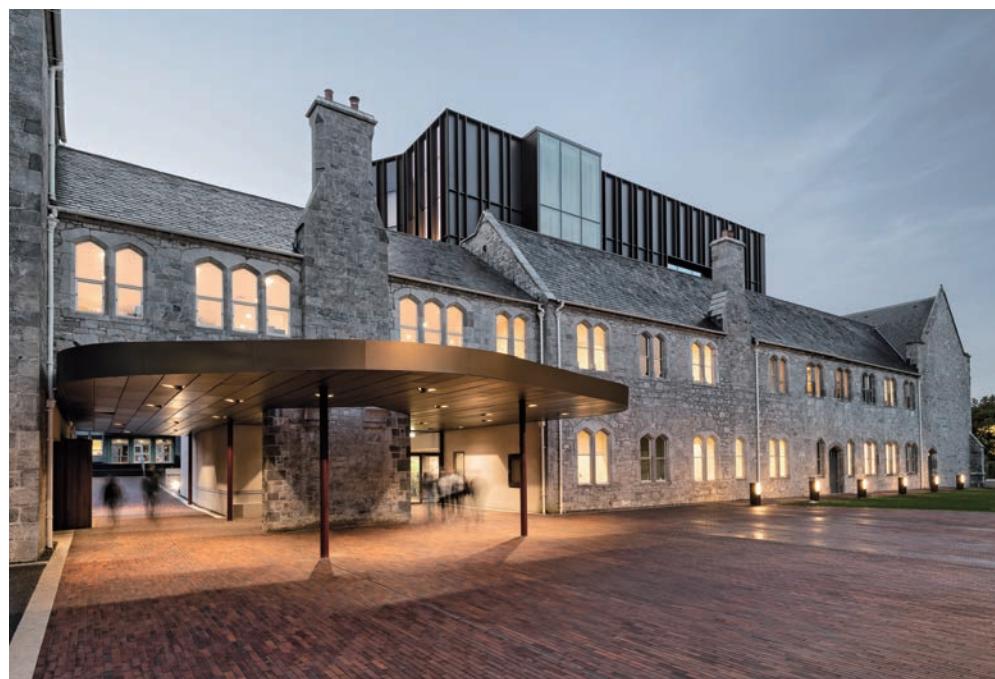
数の小路が急斜面の麓の古い石段に集まる地点に、川に架ける歩道橋の設計を依頼された。積層材による大スパンの梁が、コンクリートによる斜方バットレスの上に載っている。梁の両端は土地の条件に合わせて変えられた。アクセス路となる2本のスロープの片側の脚元にアーケードが作られ、川の氾濫期に水が橋を通過できるようにした。カヴァナー・ブリッジはキャンパスへの新しい公式アクセス路となり、河川風景と最も近い市街地とを結んでいる。

われわれが完成させた最新の建物は新しい学生活動センターで、中央中庭の西隣に位置する。このスチューデ

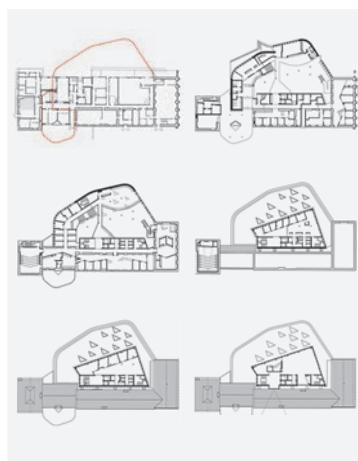
ント・ハブは、慎重な修復工事によって、歴史あるウインドル医学館を組み込んでいる。医学館の直線的な建物に、学生の社会活動のためのくつろいだ空間を増築した。

三方が建物で閉じられた四辺形の中央中庭は手を加えずに残された。4つの辺は南に向かって美しく開かれたままで、点々と立つヒマラヤスギの向こう側では、コンクリート造の近代的な図書館が古い採石場のヴォイドを占めている。他の三辺を囲うように、新しい建物群——ギャラリー、橋、スチューデント・ハブ——が一体となって、中央中庭が風景を切り取る額縁を支える。こうして中庭の重要性を守り、キャンパスの中枢としての位置を強化している。

われわれが手がけた3つのプロジェクトは、中央中庭の厳密に直線的で安定した造形の周りを、緩やかに数珠つなぎにする三角形をつくり出す。ギャラリーは木々の間に浮かぶように見えるが、川沿いの低い土地の風景にしっかりと固定されている。橋は、川と直交させて自然の流れを中断させるのではなく、蛇行する既存の歩道と連続するよう川を斜めにまたいでいる。[ハブでは]僧房のような部屋の分厚い壁が古い校舎の裏手で折れ曲がり、学生が集まる屋外空間を囲い込む。大学本部のランタン塔と催事スペースが、古い屋根の連なる景観の上に突き出



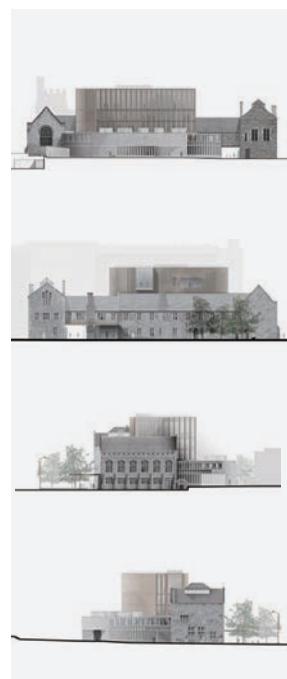
東側ファサード



各階平面図



断面図



立面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2021 Mondadori Media

©2021 Architects Studio Japan



西側の新築棟

す。新築の建物群は躍動的な要素、場にふさわしい変化のベクトルとして作用し、所与の環境条件を強化する。

別個に構想されたが、立地環境によって連結されたこれらとの仕掛けを今から振り返ってみると、密接に関係づける見慣れた類似性に気づかされる。幾何学、素材、構造における無意識の類似性が突如として自明となるの

だ。ギャラリーとスチューデント・ハブの空間構成はどちらも、屋外動線の流動的な線に貫かれている。橋のラインは意図的にクランク状に曲げられ、多方向から来る歩行者の動きを合流させる。

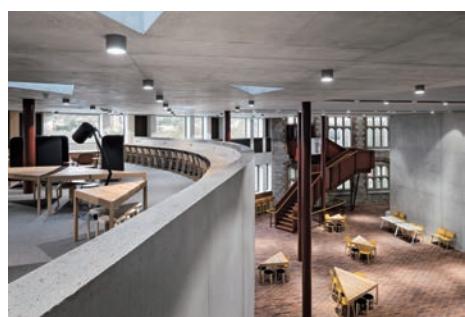
3つの異なるデザインはある共通の戦略を有している。どのプロジェクトも単純な提案に基づいているのである。すなわち、個々の建物は専有領域の一部を公的領域に共通の利益のために分け渡す。それぞれが機能的内容を越える何かに貢献し、広々とした空間に新たな次元を付け加える。それは全体のスキームの中でより大きな役割を果たすべく、限られた予算から捻出された。こうして、小さなベンチが陽だまりで一休みできる有益な小空間をつくり出し、屋根のあるポーチは雨の日に人々が集まって交流できる場所となった。



修復されたウインドル医学館



新築棟:エントランス・エリア



新築棟:2階バルコニーより見る

作品:UCCスチューデント・ハブ | 設計:オドネル+トゥオメイ

構造:Horganlynch Consulting Engineers | 設備:RPS Group

コンサルタント:JCA(保存); AECOM(コスト);

Maurice Johnson + Partners(防火設備); Fionnuala Rogerson

Architects(アクセシビリティ); Linesight(PSDP/設計プロセス監督);

i3 PT(BCAR/建築管理修正規則); QA Design(ケータリング)

建築主:University College Cork

スケジュール:設計競技 2014年/施工 2020年

規模:延床面積 4,000 m²

所在地:University College Cork, College Road, Cork, Ireland

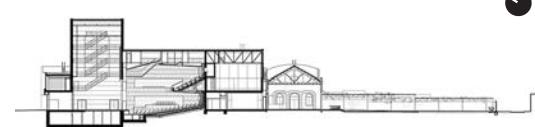
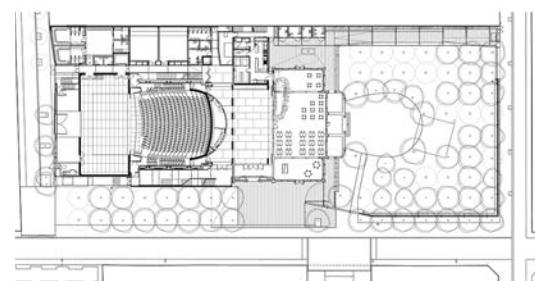
「テアトル・ラルテサ」 El Prat de Llobregat, Spain

設計:AMMアルキテクテス+フォルガス・アルキテクテス

歴史の連続、空間の連続 フランチェスカ・キオリーノ

参照 | 本誌 pp.40-51

過去の建築遺産を現在の必要に適合させるのは、今日的な挑戦のひとつである。劇場建築は、観衆の要求と芸術の要求が出会う場であり、歴史ある劇場の舞台装置の再生においても増築においても、特有の問題を孕むこのテーマを体现している。現代に適合させる際、舞台装置(およびホール)を総取替えするほうが、構造が老朽化もしくは損傷して使い物にならぬ、とにかく現代に適さない建物にこだわり続けるよりも、はるかに効果的で理に適ることはよく起きる。他方で、既存建築の持つ性格を生かし空間を形式にとらわれずに扱うことが、可能な限りすべての抜本的な再利用と両立する場合もあり、そこでは過去の痕跡の積層に独自の価値を見出すことになる。バルセロナ一帯では、多くの建物が劇場=娯楽施設に「リサイクル」され、近年はこのテーマを巡る考察の観測地点となっている。2016年に落成したフローレス&プラツのサンラ・ベケット(『CASABELLA』875/876号)、あるいはHアルキテクテスによる2017年のリエヤルタト・サントセンカの市民センター(904号)を思い出してほしい。これらは方法こそ



平面図/断面図/立面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2021 Mondadori Media

©2021 Architects Studio Japan



街路より見る

庭よりカフェ／バール棟を見る

メイン・ホール

異なるが、既存建築を研究し、過去の亡靈や痕跡を新たな、形式ばらず調和的なコンテクストに統合する要素と捉えた事例である。

アル・プラ・ダ・リュブラガートに蘇ったテアトル・ラルテサの場合、何を保存し何を取り替えるかについての主たる評価は、設計競技を前提とし、建物の損傷状態を機能と構造の面から調査した結果であった。

この建物はもともと、セントレ・アルテサ・レクリエーション協会のイニシアチブにより1919年に建設された。アントニ・パスカル・イ・カレーテロというカタルーニャ人建築家の作品で、彼はアルヌーヴォー様式の設計案をいくつか手がけ、20世紀初頭にバルセロナ県内で実現している。異なる種類の天井に覆われた3つのメイン・ヴォリューム（劇

場ホール、エントランス、バール）が特徴的なアルテサの建物は、組積造の簡素なファサードに一貫性があり、工業的モダニズムに典型的な構成と装飾の単純さを持っている。バール手前のテラスや木々の茂る庭などの建物の外廻りも、施設全体の構成要素である。

劇場であるが、特に映画館として、さらにカフェテリアとして使われた建物は、1988年に放棄され、漸進的な衰退がはじまった。2003年にアル・プラ・ダ・リュブラガート市が全所有権を買い取り、再生計画に着手した。

設計要綱の策定に先立つ構造調査により、建物の損傷状態が証明され、とりわけ劇場本体の舞台周辺、内部の床板、屋根の傷みが明らかになった。設計競技は参加者の少なさを指摘されたプロセス上の問題や、ホール取り

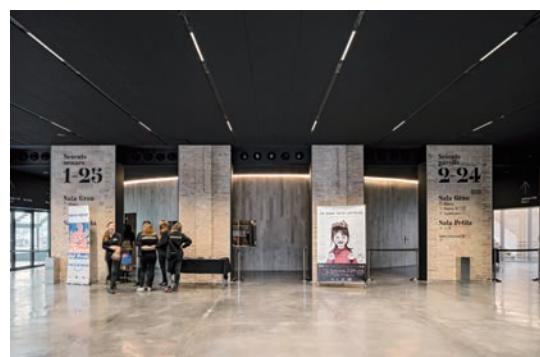
壊しの予備的な選択が原因で少なからず論争を引き起こしたもの、フォルガス・アルキテクテスとAMMアルキテクテスのチームによる「Histories」設計案が勝者に選ばれた。

建築家のボッシュとフォルガスがタッグを組んだ設計案を特徴づけるのは、最も目立ち、建築遺産として価値のあるファサードがついたカフェとホワイエのヴォリュームだけでなく、劇場ヴォリュームの側面ファサードも保存し、それ以外を取り壊すという選択である。

生まれ変わった建物を見ると、新しい劇場建築に既存のファサードが組み込まれている。窓と付け柱がついただけの組積造の古いファサードは、屋内ファサードに姿を変え、2層吹き抜けのガラス張りのギャラリーを介して道路からもよく見える。新しいファサードを構成するこのギャラリーは、階段室となっている。反対側では2つめの古いファサードが建物内部に向けて建ち、ここでも2つの階を結ぶ動線の一部になっている。劇場本体は設計競技要綱に示された通り、伝統的な馬蹄形の新劇場に建て替えられた。かつてあった劇場のタイポロジーとその安定したフォルムを呼び起こすため、現代性の象徴たる柔軟で形式的でない舞台空間の追求は断念された。新築のヴォリュームは現代的な文化センターに必要な諸設備を備えるために拡張され、剥き出しの煉瓦壁で全体を覆われた建物として姿を現わす。そこでは新しい部分が、保存された古い部分に統合され、接ぎ木されている。



ホワイエ：右にカフェ入口を見る

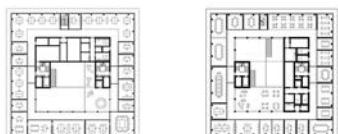


ホワイエ：正面にメイン・ホールを見る

「ローザンヌ大学国際スポーツ科学研究所」Lausanne, Switzerland

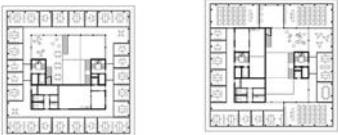
設計=カラムーク+クオ

参照 | 本誌pp.72-77



作品:ローザンヌ大学国際スポーツ科学研究所 | 設計:カラムーク+クオ

設計チーム:Jeannette Kuo, Ünal Karamuk, Flavia Sutter (project leader),
Andreas Papa-dantonakis, Catarina Bello, Brian Jordan, Philipp Grossenbacher,
Samuel Dautheville, Alexandre Lebet, Adrien Comte



コンサルタント:Pragma Partenaires(プロジェクト/コスト・マネージメント);

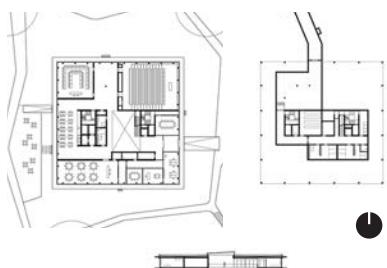
Kartec Engineering, Weber+Brönnimann(構造);

Emmer Pfenninger Partner(ファサード); Weber+Brönnimann(ランドスケープ);

Raumanzug with Jakob Forrer(機械設備); H. Schumacher(衛生設備);

Enerpeak Salzmann(電気設備); Raumanzug(建築物理);

Martin Lienhard(音響); Alois Godinat(アート)



施工:HRS Real Estate; ADV SA(コンクリート躯体); Veralubois SA(窓);

Strähle AG(ガラス壁); Freitec(ファサード鉄工事); Decker(鉄工事)

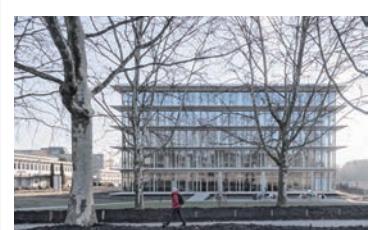


建築主:ヴォー州 | 用途:大学研究施設

各階平面図/断面図

スケジュール:公開設計競技 2013年/設計・施工 2013-08年

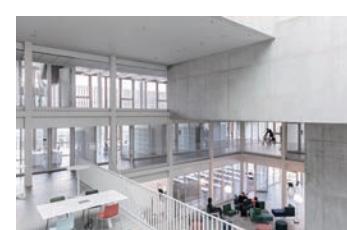
規模:延床面積 6,755m² | 所在地:Lausanne, Canton Vaud, Switzerland



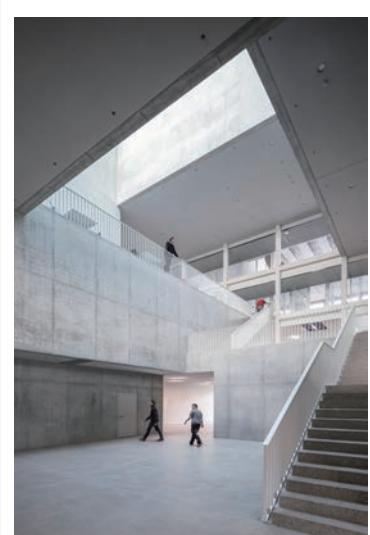
全景



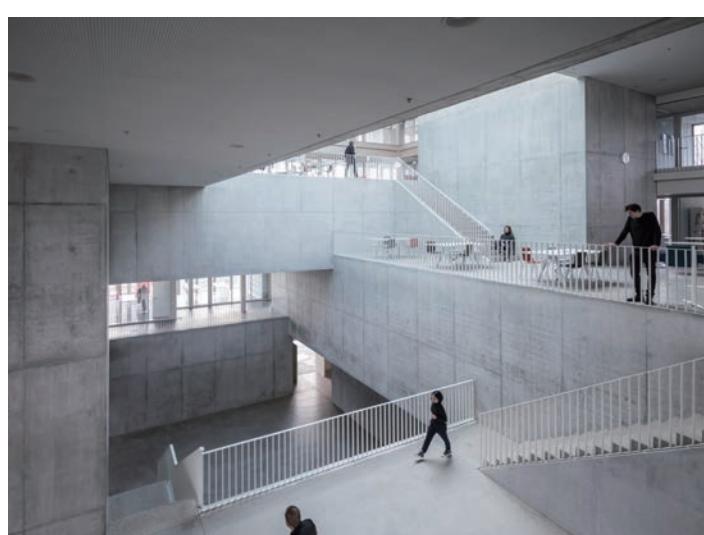
オフィス通路



上層階の吹抜け



ロビー



ロビーを見下ろす

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2021 Mondadori Media

©2021 Architects Studio Japan